

論 文 要 旨

報告番号 甲・乙	第 号	氏 名	坂本 祐史
<p>[論文題名] Immediate Effects, Detailed Clinical Outcomes and Prognostic Factors of Chemonucleolysis Using Condoliase for Lumbar Disc Herniation</p> <p>雑誌名, 巻 (号のみの雑誌は号), 頁一頁, 発行西暦年 Neurologia medico-chirurgica – in press</p> <p>著者名 Yushi Sakamoto, Seiichiro Naruo, Tomonori Ozaki, Shogo Tahata, Toru Fujimoto, Tatsuya Abe</p> <p>[要 旨] 腰椎椎間板ヘルニア(LDH)に対するコンドリナーゼ注入療法は、椎間板内の保水量を減少させることで内圧を下げ、神経根の圧迫を軽減されることで症状を緩和させる治療である。今回我々は治療後翌日、1か月後、3か月後の下肢痛NRSを測定し、ベースラインから3.5以上の改善を得られたものをI群、3.5未満をN群として予後予測因子を測定した。2020年4月から2023年3月までに治療を受けた患者のうち、合計225人が研究に含まれた。平均年齢は46.5 ± 16.5歳で、男性が151人、平均病期は6.2 ± 8.52ヶ月であった。翌日時点で60例、手術後1か月には118例、手術後3か月には152例が改善群に分類された。治療前の病期は、治療後1か月(8.19 ± 8.74 [I群] vs 5.17 ± 8.04 [N群])および3か月(8.51 [I群] ± 7.35 vs 5.69 ± 8.87 [N群]月)と改善群で有意に短かった。下肢痛NRSの比較の結果、治療翌日(6.02 ± 2.64 [I群] vs 7.50 ± 1.79 [N群]), 1か月後(5.13 ± 2.69 [I群] vs 7.58 ± 1.66 [N群]), 3か月後(4.42 ± 2.70 [I群] vs 7.34 ± 1.77 [N群])でI群で下肢痛NRSに差がみられた。 LDHに対するコンドリナーゼ注入療法は治療翌日から症状を改善し、手術を避けるための侵襲が少ない治療法となり得ると考えられた。</p>			

備考 1 論文要旨は、600字以内にまとめるものとする。

2 論文要旨は、研究の目的、方法、結果、考察、結論の順にタイプ等で印字すること。

論 文 要 旨

報告番号 甲・乙	第	号	氏 名	白濱裕梨
<p>[論文題名] Cluster analysis defines four groups of Japanese patients with adult-onset Still's disease</p> <p>雑誌名, 巻 (号のみの雑誌は号), 頁一頁, 発行西暦年 Modern Rheumatology,34,1-8,2024</p> <p>著者名 Yuri Shirahamaa, Ayako Kokuzawab, Yusuke Yamauchic, Yohei Kirinod, Hideto Nagaid, Yasushi Inouee, Toshiyuki Otaf, Yutaka Chifug, Hiroki Mitomac, Mitsuteru Akahoshia, Mariko Sakaia, Akihito Maruyamaa, Akihide Ohtah, Masahiro Iwamotob and Yoshifumi Tad</p> <p>[要 旨] Objectives: To define groups and characterize differences in the prognosis of patients with adult-onset Still's disease (AOSD). Methods: We performed a retrospective cohort study. Patients with AOSD were grouped using hierarchical unsupervised cluster analysis according to age, sex, clinical features, and laboratory data. The primary endpoints were overall survival and drug-free remission rate. Results: A total of 153 patients with AOSD were placed into four clusters. Those in Cluster 1 had a young onset, tended to be female, and had fewer complications and moderate ferritin concentrations. Those in Cluster 2 had a young onset and had more complications and higher ferritin concentrations. Those in Cluster 3 had a young onset, tended to be male, and had no lymphadenopathy and fewer complications. Those in Cluster 4 had an older onset, tended to be female, and had more complications and higher ferritin concentrations. Overall survival tended to be lower (P= .0539) in Cluster 4, and drug-free remission was higher in Clusters 1, 2, and 3 [hazard ratios (HRs) 2.19, 3.37, and 3.62 vs. Cluster 4, respectively]. Conclusions: Four groups of AOSD that have distinct clinical manifestations, ferritin concentrations, severity, and drug-free remission rate were identified, which were lowest in Cluster 4.</p>				

備考 1 論文要旨は、600字以内にまとめるものとする。

2 論文要旨は、研究の目的、方法、結果、考察、結論の順にタイプ等で印字すること。

論文要旨

報告番号 甲・乙	第 号	氏 名	室屋 和子
[論文題名] Factors Contributing to Well-being in Japanese Community-Dwelling Older Adults Who Experienced Spousal Bereavement 雑誌名, 巻 (号のみの雑誌は号), 頁一頁, 発行西暦年 Research in Gerontological Nursing, Vol. 17, No. 3, pp121-130, 2024 著者名 Kazuko Muroya, Yasuko Tabuchi, Yuki Kumagai, Maiko Sakamoto, and Tsukasa Tajima [要 旨] (目的) 配偶者との死別を経験した高齢者が悲嘆のプロセスを経て心理的に回復し健康で幸福な余生を送るための支援は重要課題である。本研究の目的は、配偶者と死別した地域在住高齢者の精神的健康の影響要因について、活動や役割の側面から明らかにすることである。 (方法) 老年期になり配偶者と死別した高齢者 332 名を対象とし、無記名自記式質問紙票を用いた横断的調査を行った。死別後の精神的健康として、WHO-5 Well-being Index および Philadelphia Geriatric Center Morale Scale を従属変数、各要因を独立変数とし、統計ソフト JMP Pro. ver. 16 を使用しデータを分析した。 (結果) 死別後の精神的健康に影響する要因は、性別、他者の手助け無く外出できる、死別後期間が長い、趣味がある、生活・人生志向の対処方略であった。 (考察) 悲嘆の持続時間は個別性があることから、個々の状況を見極めながら趣味などの活動を勧めていくことが死別の悲しみを和らげ精神的健康によりよい効果をもたらすのではないかと考える。 (結論) 配偶者死別後の精神的健康に影響を与える要因が明らかとなり、この結果は、死別当事者の対処行動や周囲のサポートに有益な示唆を与える。			

- 備考 1 論文要旨は、600字以内にまとめるものとする。
2 論文要旨は、研究の目的、方法、結果、考察、結論の順にタイプ等で印字すること。

論文要旨

報告番号 甲・乙	第 号	氏 名	兼田 浩平
<p>[論文題名] Prevalence and temporal trends of prostate diseases among inpatients with cardiovascular disease: a nationwide real-world database survey in Japan</p> <p>雑誌名, 巻 (号のみの雑誌は号), 頁一頁, 発行西暦年 Front Cardiovac Med. 2023 Oct 19;10:1236144. doi: 10.3389/fcvm.2023.1236144.</p> <p>著者名 Kaneta K, Tanaka A, Nakai M, Sumita Y, Kaneko H, Noguchi M, and Node K.</p> <p>[要 旨] 【目的】前立腺疾患は一般に加齢とともにその頻度が増加しメタボリックシンドロームや生活習慣病との関連が指摘されており、循環器疾患との病因・疫学的な関連が示唆される。しかし、両疾患群の関連に着目した研究は限定的であることからその疫学的実態を明らかにすることとした。 【方法】循環器疾患による入院患者を対象とした我が国の循環器疾患領域における最大規模のデータベースである循環器疾患診療実態調査 (JROAD-DPC) へ 2012 年度から 2019 年度までの間に登録された全男性症例 (約 608 万例) を対象に前立腺疾患 (肥大症・癌) の有病率及びその経年的推移を調査した。 【結果】全調査期間を通じた前立腺疾患の有病率は 5.8%、前立腺肥大症の有病率は 4.4%、前立腺癌の有病率は 1.6%であった。また、前立腺疾患の有病率は 65 歳未満で 1.1%、前期高齢者で 4.7%、後期高齢者で 9.9%であった。前立腺疾患の有病率は経年的に増加傾向を示し、特に 2015 年から 2016 年にかけてはその増加が顕著であった。なお、心不全を契機とした集団の前立腺疾患の有病率は、急性冠症候群を入院契機とした集団と比べ高率であった (8.6% vs. 4.5% : P<0.001)。 【結論】本邦での循環器疾患による入院患者における前立腺疾患の有病率は経年的に増加傾向にあり、特に心不全による入院症例ではその有病率が高かったことから、両者の連関が示唆された。 (555 文字)</p>			

備考 1 論文要旨は、600字以内にまとめるものとする。

2 論文要旨は、研究の目的、方法、結果、考察、結論の順にタイプ等で印字すること。

論文要旨

報告番号 甲・乙	第 号	氏 名	江藤 真美子
<p>[論文題名] Associations of eHealth Literacy with Social Activity Among Community-Dwelling Older Adults: A Cross-Sectional Study</p> <p>雑誌名, 巻 (号のみの雑誌は号), 頁一頁, 発行西暦年 European Journal of Investigation in Health, Psychology and Education, 14(5), 1279-1294, 2024</p> <p>著者名 Mamiko Eto, Koji Yamatsu</p> <p>[要 旨] グローバルな高齢社会を支えるためにデジタル技術が不可欠になる一方、利用する側の高齢者にはデジタル化への適応力やリテラシーが求められている。その一つが、eヘルスリテラシー (以下 eHL) である。eHL に関する多くの研究では、eHEALS という尺度を使い、健康行動を調べている。しかし、高齢者にとって、社会活動も身体機能の障害、認知機能や死亡率の低下に貢献しており、私たちの知る限り、eHL と社会活動の関連性を調査した研究はまだ行われていなかった。そこで、本研究の目的は、eHL と健康行動および社会活動(地域・文化・スポーツ活動)との関連を検討し、地域在住高齢者の eHEALS スコアに関連する要因を調査することであった。</p> <p>本研究は、佐賀県みやき町の高齢者向け健康教室の参加者を対象に、65 歳から 99 歳の住民 561 人に実施された横断研究である。</p> <p>eHEALS の平均スコアは 12.4 点(SD 8.2)で、過半数(73.3%)が最も低いスコアという結果だった。また、この研究の新しい知見は、eHL と社会活動(文化活動とコミュニティ活動)との関連性であった。これらの結果は、(1)少なくとも週に 1 回はコミュニティ活動に参加することが最良の選択であり、(2)文化やコミュニティ活動にまったく参加しないことは、最も低いレベルの eHL を持つリスクを減らす可能性があることを示していた。</p> <p>この研究は横断的であったため、eHL とこの研究の変数との因果関係は不明である。今後は、縦断研究で因果関係のある因子を特定していく必要がある。</p>			

備考 1 論文要旨は、600字以内にまとめるものとする。

2 論文要旨は、研究の目的、方法、結果、考察、結論の順にタイプ等で印字すること。

論文要旨

報告番号 甲・乙	第 号	氏 名	鹿島 裕
[論文題名] The Relationship Between Acute-Phase Circuit Occlusion and Blood Calcium Concentration in an Ex Vivo Continuous Renal Replacement Therapy Model 雑誌名, 巻 (号のみの雑誌は号), 頁一頁, 発行西暦年 Cureus 16(4): e59330.2024. (doi:10.7759/cureus.59330) 著者名 <u>Yu Kashima</u> , Hiroyuki Koami, Yuichiro Sakamoto [要 旨] 【目的】 持続腎代替療法(CRRT)は、尿毒症や多臓器不全を予防し、腎機能を改善する。しかし、臨床において、CRRT回路や血液濾過器の予期せぬ早期閉塞をしばしば経験する。このような回路閉塞に関する臨床研究は少ない。そこで我々は、任意の時点で回路閉塞を誘発するモデルが必要と考え、クエン酸加ウシ全血にカルシウムを注入する ex vivo 回路閉塞モデルを作成することにより、閉塞を予測する方法を開発し、それを評価した。 【方法】 ウシ全血を循環させながら、回路へ1mEq/mLの塩化カルシウムを持続注入(0,2,3,4mL/h)した。注入された塩化カルシウムの投与量、回路閉塞時間、および回路内圧力の経時的変化の間の関係性を評価した。さらに、血液検査および血液粘弾性検査を任意のタイミングで実施した。 【結果】 回路閉塞時間はカルシウム注入流量ごとに異なり、各群間で有意差が観察された(p<0.05)。カルシウムを2, 3, および4 mL/hで注入した場合、回路圧力は閉塞の4分前に徐々に変化し、閉塞の1分前にはより急速に変化した。カルシウム流量4mL/hでは、4分前と閉塞時、4分前と1分前、1分前と閉塞時の間で、濾過器入口圧と返血圧に有意な差が見られた(p<0.05)。 【考察・結論】 我々が開発したモデルは、回路圧力の変化に基づいて閉塞時間を正確に推定した。このモデルは、必要な閉塞時間に応じてさまざまな実験システムを構築するために利用可能である。			

備考 1 論文要旨は、600字以内にまとめるものとする。

2 論文要旨は、研究の目的、方法、結果、考察、結論の順にタイプ等で印字すること。

論文要旨

報告番号 甲・乙	第 号	氏 名	川崎 佳奈子
[論文題名] Chemoradiotherapy and Lymph Node Metastasis Affect Dendritic Cell Infiltration and Maturation in Regional Lymph Nodes of Laryngeal Cancer 雑誌名, 巻 (号のみの雑誌は号), 頁一頁, 発行西暦年 International Journal of Molecular Sciences, 25 巻, 2093, 2024 年 著者名 Kanakano Kawasaki, Keita Kai, Akimichi Minesaki, Sachiko Maeda, Moriyasu Yamauchi and Yuichiro Kuratomi			
[要 旨] 【研究の目的】 リンパ節は樹状細胞を介した免疫応答に重要である。原発巣での樹状細胞浸潤に関する検討は数種の癌腫で報告されているが、固形癌の所属リンパ節における樹状細胞浸潤に関する研究報告は、我々が渉猟した限り認められない。本研究の目的は喉頭癌の所属リンパ節における樹状細胞の浸潤状況を明らかにすることである。 【方法】 73 人の喉頭癌患者を研究対象とした。未熟樹状細胞のマーカーとして CD1a、未熟および成熟樹状細胞のマーカーとして S100 を使用し、それぞれ原発巣、転移リンパ節、非転移リンパ節で CD1a および S100 の免疫染色を行い評価した。 【結果】 原発巣では CD1a 陽性樹状細胞の浸潤が多いほど予後不良の傾向にあった。S100 陽性樹状細胞は原発巣および転移リンパ節に比べて非転移リンパ節のほうが有意に多かった。転移リンパ節では、S100 陽性樹状細胞が多い方が予後良好の傾向を示した。放射線療法後の患者においては、原発巣および転移リンパ節での樹状細胞浸潤が減少していたが、逆に非転移リンパ節については樹状細胞浸潤が増加していた。 【考察】 原発巣および転移リンパ節においては、樹状細胞の成熟を阻害する機構が存在する可能性がある。また、放射線治療は樹状細胞の誘導に影響を及ぼしている可能性がある。 【結論】 喉頭癌において、樹状細胞の成熟および誘導は癌細胞の存在や放射線治療により影響を受けることが明らかとなった。			

備考 1 論文要旨は、600字以内にまとめるものとする。

2 論文要旨は、研究の目的、方法、結果、考察、結論の順にタイプ等で印字すること。

論文要旨

報告番号 甲・乙	第 号	氏 名	佐久本 孟寿
[論文題名]			
Novel cell spheroid culture method using Medaka dried fish powder			
雑誌名, 巻 (号のみの雑誌は号), 頁一頁, 発行西暦年 Heliyon , Volume 10, Issue 19, e38418, 2024			
著者名 <u>Takehisa Sakumoto</u> , Takayuki Narita, Sayuri Morito, Megumi Nishiyama, Mariko Hashiguchi, Yumeka Mine, Shuhei Iwamoto, Shuji Toda, Shigehisa Aoki			
[要 旨]			
【目的】 細胞スフェロイド培養には複数の方法があるが、大規模培養を行う場合、マイクロキャリアは必要不可欠である。とくに、哺乳類コラーゲンは生体適合性に優れたマイクロキャリアであるが非常に高額である。魚鱗由来コラーゲンは安価であるが、変性温度が低く、哺乳類細胞の培養には不適である。本研究では、加熱後も構造を保つ干物に着目し、スフェロイド培養のマイクロキャリアとして小型魚類乾燥粉 (Dried fish powder: DFP) の有用性を確認した。			
【方法】 魚種として生物研究で用いられるメダカを選択した。頭部と内臓を除去し、凍結乾燥した後に粉碎し DFP を作成した。各種細胞株を DFP の有無の条件下で培養を行った。蛋白質発現は、プラスチック皿単層培養を比較群とし MAPK 関連蛋白の発現を解析した。			
【結果】 DFP 存在下では非存在下と比較し、各種細胞株が形成するスフェロイドはいずれも大型であり、DFP 表面では細胞接着と細胞増殖が確認された。DFP 存在下で培養したヒト表皮細胞とマウス線維芽細胞の双方で、プラスチック培養皿使用と同等の MAPK 関連蛋白の発現が確認された。			
【考察】 メダカ由来 DFP は哺乳類及び魚類細胞種に対し、高い生体適合性を示し、各細胞種の機能を十分に発揮させることが可能であった。			
【結論】 メダカ由来 DFP は哺乳類及び魚類細胞のスフェロイド培養に効果的なマイクロキャリアである。			

備考 1 論文要旨は、600字以内にまとめるものとする。

2 論文要旨は、研究の目的、方法、結果、考察、結論の順にタイプ等で印字すること。

論文要旨

報告番号 甲・乙	第	号	氏名	草場香那
[論文題名] Targeting oxidative phosphorylation with a novel thiophene carboxamide increases the efficacy of imatinib against leukemic stem cells in chronic myeloid leukemia 雑誌名, 巻 (号のみの雑誌は号), 頁一頁, 発行西暦年 International Journal of Molecular Sciences, 25 巻 20 号, 11093 頁, 2024 年 著者名 Kana Kusaba, Tatsuro Watanabe, Keisuke Kidoguchi, Yuta Yamamoto, Ayaka Tomoda, Toshimi Hoshiko, Naoto Kojima, Susumu Nakata, Shinya Kimura				
[要 旨] 目的 慢性骨髄性白血病 (CML) 患者はチロシンキナーゼ阻害剤 (TKI) に治療反応はするが、CML 白血病幹細胞 (LSC) は BCR::ABL キナーゼ非依存的な増殖を示し、TKI に感受性がないため、疾患の再発に繋がる。再発を防ぐために CML-LSC を標的とした新規治療が必要で新規化合物 NK-128(C33H61NO5S)の有効性を明らかにする。 方法 NK-128 を細胞株へ添加し、増殖能を観察した。また CML 異種移植マウスモデルを使用し、in vitro の効果を観察した。患者検体を用いて NK-128 の抗腫瘍効果を観察した。 結果 NK-128 が CML 細胞株の増殖を効果的に抑制した。CML 異種移植マウスモデルを使用し、イマチニブと NK-128 の併用がどちらか単剤よりも強力であると証明した。NK-128 は未治療 CML 患者骨髄から分離した CD34+ CML 細胞によるコロニー形成を阻害すると分かった。 考察 原始的な CML 細胞集団の CD34+CML 細胞でのミトコンドリアを介した酸化的リン酸化 (OXPHOS) は、正常な未分化造血細胞における割合よりも高い。従って、CML-LSC における OXPHOS の阻害は、CML の新規治療になりえる。 結論 NK-128 は OXPHOS を標的とし、CML-LSC を排除でき、CML 治療を改善する可能性がある。				

備考 1 論文要旨は、600字以内にまとめるものとする。

2 論文要旨は、研究の目的、方法、結果、考察、結論の順にタイプ等で印字すること。

論 文 要 旨

報告番号 甲・乙	第 号	氏 名	窪津 祥仁
<p>[論文題名] FIB-4 Index and Liver Stiffness Measurement are Potential Predictors of Atherosclerosis in Metabolic Dysfunction-Associated Steatotic Liver Disease</p> <p>雑誌名, 巻 (号のみの雑誌は号), 頁一頁, 発行西暦年 Journal of Atherosclerosis and Thrombosis, in press</p> <p>著者名 Yoshihito Kubotsu, Yoshiko Sakamoto, Motoko Tago, Atsuko Chihara, Misa Norita, Chika Inadomi, Kaori Inoue, Hiroki Takayanagi, Kenichi Tanaka, Hiroshi Isoda, Takuya Kuwashiro, Satoshi Oeda, Toshiyasu Shiratori, Keizo Anzai, Koichi Node, Hirokazu Takahashi</p> <p>[要 旨]</p> <p><目的> 心血管疾患 (CVD) は代謝機能異常関連脂肪性肝疾患 (MASLD) 患者の一般的な死因である。したがって、CVDサーベイランスは重要であるが、その方法については十分に確立されていない。われわれは、MASLD患者における肝線維化と頸動脈アテローム性動脈硬化症、冠動脈狭窄の関連を検討した。</p> <p><方法> 頸動脈超音波検査を受けたMASLD患者153人が登録された。プラークを含む最大内中膜複合体厚 (Max-IMT) を超音波で測定した。肝線維化を予測するために、FibroScanにより肝硬度を測定し、線維化予測式であるFIB-4 indexを算出した。Max-IMTが1.1mm以上の患者を対象として、冠動脈の狭窄を検出するために、冠動脈CTを行った。</p> <p><結果> Max-IMTの中央値は1.3mmで、63例 (41.2%) が1.5mm以上であった。FIB-4 indexおよび肝硬度はそれぞれMax-IMTと有意に相関した ($\rho = 0.356, p < 0.001, \rho = 0.25, p = 0.002$)。肝硬変は年齢とは無関係に、Max-IMT 1.5mm以上と有意に関連していた。FIB-4 indexが高い患者ほど中等度または重度の冠動脈狭窄が多かった。FibroScanで測定した肝硬度が高いほど中等度または重度の冠動脈狭窄も多く、特に重度の狭窄が多かった。</p> <p><結論> 肝線維化パラメーターは頸動脈アテローム性動脈硬化症および冠動脈狭窄と関連していた。肝線維化の評価は、MASLD患者における有意なアテローム性動脈硬化症および冠動脈狭窄を同定するのに有用と思われる。</p>			

備考 1 論文要旨は、600字以内にまとめるものとする。

2 論文要旨は、研究の目的、方法、結果、考察、結論の順にタイプ等で印字すること。

論 文 要 旨

報告番号 甲・乙	第 号	氏 名	山田麻里江
<p>[論文題名] Immune cell kinetics after allogeneic red blood cell transfusion in patients undergoing cardiovascular surgery</p> <p>雑誌名, 巻 (号のみの雑誌は号), 頁一頁, 発行西暦年 TRANSFUSION CLINIQUE ET BIOLOGIQUE, Volume 31, Issue 4, Pages 223-228, 2024.</p> <p>著者名 Marie Yamada, Mami Nakao, Naotomo Yamada, Hideaki Nakamura, Manabu Itoh, Junji Yunoki, Keiji Kamohara, Shinya Kimura, Eisaburo Sueoka</p> <p>[要 旨] 【目的】最近の報告では、同種輸血が免疫応答を低下させ、患者の転帰に影響を及ぼすことが指摘されているが、同種赤血球輸血が免疫細胞の構成に及ぼす影響については、詳細な解析はなされていない。我々は同種赤血球輸血の影響を評価する目的で、心臓血管外科手術の周術期に同種赤血球を輸血した患者の宿主免疫細胞の変化を解析した。 【方法】手術を受けた非輸血患者 8 人、術中自己血輸血患者 22 人、同種赤血球輸血患者 36 人の 3 群について、フローサイトメトリーを用いてリンパ球サブセットを解析した。手術前、約 1 週間後、1 ヶ月後におけるリンパ球サブセットの変化に加え、各種臨床パラメーター、手術時間、出血量、入院期間等との関連について評価した。 【結果】輸血群は非輸血群と比較し、手術時間、出血量、入院期間において有意差を認めた。自己血輸血群と同種血輸血群の比較では、同種赤血球輸血群のみが入院期間が長かった。術前と術後 1 週間、1 ヶ月の検体を比較したところ、CD4、CD20、NK 数では自己血輸血群と同種赤血球輸血群でほとんど差がなかったが、同種赤血球輸血群では術前と比較して術後 1 週間でリンパ球数の有意な減少が観察された。CD8 +細胞数は術後 1 週間の同種輸血群で統計的に減少した。 【結論】同種赤血球輸血が免疫細胞組成、特に CD8 +細胞に影響することが示唆されたが、本研究は限られた患者数の解析であり、今後の追加解析が必要である。</p>			

備考 1 論文要旨は、600字以内にまとめるものとする。

2 論文要旨は、研究の目的、方法、結果、考察、結論の順にタイプ等で印字すること。

論 文 要 旨

報告番号 甲・乙	第 号	氏 名	木村俊一郎
<p>[論文題名] Effect of skin-capsular distance on controlled attenuation parameter for diagnosing liver steatosis in patients with nonalcoholic fatty liver disease</p> <p>雑誌名, 巻 (号のみの雑誌は号), 頁一頁, 発行西暦年 Scientific reports 11 15641 2021</p> <p>著者名 Syunichiro Kimura, Kenichi Tanaka, Satoshi Oeda, Kaori Inoue, Chika Inadomi, Yoshihito Kubotsu, Wataru Yoshioka, Michiaki Okada, Hiroshi Isoda, Takuya Kuwashiro, Takumi Akiyama, Aya Kurashige, Ayaka Oshima, Mayumi Oshima, Yasue Matsumoto, Atsushi Kawaguchi, Keizo Anzai, Eisaburo Sueoka, Shinichi Aishima Hirokazu Takahashi</p> <p>[要 旨] 研究の目的 NAFLD/NASH 診断は肝生検による病理組織診がスタンダードであるが、FibroScan などの非侵襲的な肝脂肪化・肝線維化の定量法も普及しつつある。FibroScan による controlled attenuation parameter (CAP) は肝内伝播する超音波の振幅減衰に準ずる測定値であり、肝脂肪化に関して定量的価値を供する点において有用性が期待される。しかし肥満例においては特に、皮膚肝表距離(skin-capsular distance: SCD)は個体差が大きく、定量結果に与える影響として無視できない因子であるにも関わらず、SCD 自体が CAP 値に与える影響は未知であるため研究を行った。</p> <p>方法 2017 年 5 月から 2019 年 8 月までに佐賀大学医学部附属病院を受診し、肝生検により NAFLD と診断され、FibroScan M プロブの適応 (SCD 25mm 以下) により、SCD が 25mm を超える 37 人の患者は除外され、113 人の患者のデータで単回帰分析や重回帰分析など解析を行い、CAP と関連する因子は何かを探った。</p> <p>結果 単回帰分析や重回帰分析により、SCD は CAP と独立して関連する因子だと分かった。多変量解析によると、SCD と血清アルブミン濃度を用いて調整 CAP 値を求めるために、以下のような 2 種類の計算式を作成した。: 調整 CAP (dB/m)=CAP-(5.26×SCD)、調整 CAP(dB/m)=CAP-(5.35×SCD)-(25.77×血清アルブミン濃度) である。脂肪症診断のための受信者動作特性曲線下面積は、調整 CAP 値が元の CAP 値よりも有意に大きかった。</p> <p>結論 SCD は CAP と独立して関連する因子であり、超音波エラストグラフィにおいて SCD を考慮に入れることがさらなる肝脂肪化評価の精度向上につながる事が分かった。</p>			

備考 1 論文要旨は、600字以内にまとめるものとする。

2 論文要旨は、研究の目的、方法、結果、考察、結論の順にタイプ等で印字すること。

論 文 要 旨

報告番号 甲・乙	第 号	氏 名	趙文莉 (ZHAO WENLI)
<p>[論文題名]</p> <p>HSPA8 Single-Nucleotide Polymorphism Is Associated with Serum HSC70 Concentration and Carotid Artery Atherosclerosis in Nonalcoholic Fatty Liver Disease</p> <p>雑誌名, 巻 (号のみの雑誌は号), 頁一頁, 発行西暦年 Genes (Basel) 13, 1265, 2022.</p> <p>著者名 Wenli Zhao, Hitoe Mori, Yuki Tomiga, Kenichi Tanaka, Rasheda Perveen, Keiichiro Mine, Chika Inadomi, Wataru Yoshioka, Yoshihito Kubotsu, Hiroshi Isoda, Takuya Kuwashiro, Satoshi Oeda, Takumi Akiyama, Ye Zhao, Iwata Ozaki, Seiho Nagafuchi, Atsushi Kawaguchi, Shinichi Aishima, Keizo Anzai, Hirokazu Takahashi.</p> <p>[要 旨]</p> <p>【目的】 Heat shock cognate 71 kDa protein (HSC 70) は、heat shock protein family A member 8 (HSPA 8) 遺伝子によってコードされる heat shock protein 70 (HSP 70) ファミリーのメンバーである。多くの細胞プロセスに関与する分子パートナーである。実験と臨床研究により、HSC 70/HSPA 8 と CVD との間に関連があることが明らかになった。そこで、本研究は HSPA 8 SNP、粥状動脈硬化と NAFLD 肝臓発病機序の間の関連を調査した。</p> <p>【方法】 佐賀大学病院の組織学的に NAFLD と診断された日本人患者 123 人のデータを分析した。HSPA 8 SNP (rs 2236659) を測定し、遺伝子型を主要 (TT; homozygous) または副次的 (TC; heterozygous and CC; minor homozygous) に分ける。頸動脈超音波 IMT を測定した。次に、遺伝子型間 IMT が組み込んだパラメータを比較する。</p> <p>【結果】 主要等位遺伝子型を有する患者の血清 HSC 70 濃度は、少なくとも 1 つの副次等位遺伝子コピーを有する患者より明らかに高かった。HSPA 8 遺伝子型と男性最大 IMT との相関。MaxIMT は異なる繊維化段階で有意な差を示した。男性患者において、少なくとも 1 つの二次等位遺伝子コピーを有する患者の最大 IMT は、主要等位遺伝子が純粋に結合している患者 (2.1 対 1.2 mm、p=0.005) より明らかに大きく、女性患者間に有意差はなかった高血圧患者の肝線維化は非高血圧患者よりも深刻である。</p> <p>【結論】 HSPA 8 SNP (rs 2236659) は男性 NAFLD 患者の頸動脈粥状硬化と関係がある。CVD のリスクを予測するために、HSPA 8 SNP を遺伝子分離することは、特に高齢男性患者に有用な方法かもしれない。</p>			

備考 1 論文要旨は、600字以内にまとめるものとする。

2 論文要旨は、研究の目的、方法、結果、考察、結論の順にタイプ等で印字すること。

論 文 要 旨

報 告 番 号 甲 ・ 乙	第 号	氏 名	前田 佐知子
<p>[論文題名]</p> <p>Analysis of CD1a-positive monocyte-derived cells in the regional lymph nodes of patients with gallbladder cancer</p> <p>International Journal of Molecular Sciences, 25 卷, 12763 頁, 2024 年,</p> <p>著者名 前田佐知子、甲斐敬太、川崎佳奈子、田中智和、井手貴雄、能城浩和</p> <p>[要 旨]</p> <p>樹状細胞は主要な抗原提示細胞であり、リンパ節は樹状細胞を介した免疫応答において重要な役割を果たしている。CD1a は単球由来樹状細胞 (moDC) のマーカーとして知られている。本研究では、胆嚢癌 70 例の所属リンパ節における CD1a 陽性樹状細胞の浸潤状況に着目し、臨床病理学的因子との関連を検討した。所属リンパ節への CD1a 陽性樹状細胞浸潤が多い症例は、少ない症例に比べて有意に生存期間が短く、その全例でリンパ節転移を認めていた。多変量解析では、リンパ節転移との交絡によって、所属リンパ節への CD1a 陽性樹状細胞浸潤は独立因子とはならなかった。リンパ節転移陽性例(n=32)においてサブグループ解析を行ったが、所属リンパ節への CD1a 陽性樹状細胞浸潤と生存期間に有意な関連は認めなかった。一方で、原発腫瘍への CD1a 陽性樹状細胞浸潤は生存期間と有意な関連を認めた。</p> <p>所属リンパ節への CD1a 陽性樹状細胞浸潤とリンパ節転移に強い関連があるという結果は、CD1a 陽性樹状細胞が腫瘍近傍で単球から分化するという説を裏付けるものである。種々の固形癌において、CD1a 陽性樹状細胞と所属リンパ節に着目した研究が報告されているが、その結果は一定しておらず、所属リンパ節への CD1a 陽性樹状細胞浸潤の意義は癌腫や原発臓器によって異なる可能性がある。固形癌の所属リンパ節における CD1a 陽性樹状細胞の役割や意義を明らかにするには、今後の更なる研究が必要である。</p>			

備考 1 論文要旨は、600字以内にまとめるものとする。

2 論文要旨は、研究の目的、方法、結果、考察、結論の順にタイプ等で印字すること。